

浪漫的愛の象徴としてのゾフィー像

朝 倉 保 平*

Sophie als das Symbol der romantischen Liebe des Novalis

von

Hohei ASAKURA

今にしてはじめて僕はゾフィーが、僕の平安、僕の活動、僕の全生活の土台石であつたのだ、と感じています。1797年3月14日、フリードリッヒ・シュレーゲルにこゝろ書き送つたフリードリッヒ・フォン・ハルテンベルク（青い花の詩人ノヴァリス）は、次の日にはテュンメル夫人に宛てて、あの花びらはやはり、あの世へ吹き散つてしまいました。と傷心の思いをこめて、彼の恋人ゾフィー・フォン・キューンの死を報せなければならなかつた。更に、僕にはまだしてしまいたい仕事から、わずかばかりあります。——それをやり終えて、愛と権がれの焰を燃えたたせて、愛しい亡き人のあとをこの愛の魂に追わせましょう。と書き送つた。

ハルテンベルクが、われとわが心をして、亡き愛人の後を追うと誓いたのは、その死の悲しみに打ちひしがれ、顛倒錯乱した學句の妄言ではなくて、ゾフィーの死が迫つて来ると共に、彼の心をみだし、彼の支えであつたこの15才の少女への夜も昼も燃し続け、傾け傾けた心が、死への意志によつて、肉体を凌駕してこの少女との神秘的交わりを可能ならしめようと考えはじめ、少女の死を契機に、空想や希望でなしにそう決心し、かつ実現しようとして一切を集中したのである。僕の秋が来ている。彼は自分の心に一つのみのが成熟するのを感じた。自殺という未熟な考えから、彼は自からの意志による死を実現すること、おそくともその年のクリスマス頃迄を期待し、ゲーテが親和力において描いたオッティリエの自発的決意によつてなされた最後を、彼は現実的に、実現しようとしたのである。死において愛はもつとも甘美である。と誌すと共に、甘美なる悲しみは、まことの愛の本来の性質である。と日記に書きつけた彼のひたむきな憧憬の底に、真実の響を深くこめて、競むものに伝えるものは、愛が死をすら超えて、完成成就すべき人間の対象であり、課題であるとする彼の根本的モチーフである。

人間が理性で割切つて、あれは家、あれは花と意味ず

* 信州大学繊維学部語学研究室

けしてお互に解り切つたもののように扱つて驚異も敬虔さもなくなつている世界が、無限の完全さの前に、如何に卑劣で、はかない存在であることか。この不安さをやわらげ、この存在を無限と結ぶもの、不完全さを完全とする仲介者、むしろ完全そのもの——生と死の区別する必要としない愛の世界の期待である。神は愛である。——愛は最高の實在だ。——本原である。彼はこゝろ説明する。彼は實在を支えているものが、この宇宙に解き放たれたれ、浸みわたつている愛であつて、所有でない。という。

ゾフィーの死に続いて、丁度一ヶ月して、愛する弟エラスムスの死に出会つた彼の心には、いよいよこの確信と決心が揺らぐことなく形作られて行つた。

彼は、ゾフィーの死後、彼女の逝つた日から起算した日付の日記を書いている。この日記の中に、「決心」という言葉が頻々用いられているが、この決心こそ正に上述の愛の実現を指しているのであるが、この日記の終りに近づくに従つて、異つた感覚が「決心」という言葉を取り囲んで来るように思われる。この色調の異なるあとを辿つて、ハルテンベルクがゾフィーの死を契機に彼の内なる詩人が完成され、彼が詩人として、愛の根本モチーフの展開と体験に、短い生涯を貫き、ゾフィーの死後一年余りでユリーエとの婚約を結ぶに至つた経過を理解したいと思う。

人間が深刻な苦惱の体験から死を決意することはありうることであるが、自己の存在目的とまで考えていたゾフィーとの死別のはげしい打撃、特に、ハルテンベルクの場合、相手のゾフィーがわずか13才の少女であり、それほどすぐれた容姿、資質の持主であつたとも思われないう凡庸な一少女によつて、触発された詩人の内部の醗酵、成熟、成長が、地上的な死を超えて、自在に飛翔する精神の活動に向ひ、フロレンスの詩人が愛人ベアトリーチェの死によつて、Vita Nuovaを歌ひ出したごとく、この同年輩の詩人ノヴァリスもゾフィーの死の耐えがたき苦惱の中から、彼の新生を詠いだすのである。

彼の夜の讃歌(1780)が単なる恋人の死を嘆く悲しみの響きのみを読者に伝えず、胸に込み徹る深い悲哀を伝えるものは、死の究極に立つて、その死の解脱、人類の究極の救い、新生の静寂が歌はれている故であつて、この作品に迄結晶すべき詩人が、ゾフィーの死の最初の慟哭から理性で解きたい、狭い光に限りられない所、即ちすべてを包む夜の中で万象は神に、愛に包まれている夜を信じ讃美する。夜の讃歌の世界を打倒するに到る迄には、時の抵抗し難い治癒力が必要であつた。いや彼の場合には、この時の経過に伴つて自然の行平均化運動に対して、一方では、精神の平衡状態を漸々に取戻し、他方、この恢復に抵抗して、最初の純粋な感動の持続を意図した。しかし、漸々にゾフィーの体験は質的に変化し、純化し、彼の精神の深部に沈潜して、超時間的、超空間的な無限の彼方に、広大な愛に拡散した対象としてのゾフィーへの熱烈な希求と祈りにかかつていつた。加えて、彼の天性に、このような運命の圧迫に押しひしがれることのない軽やかな楽天的な性向があつたことも考え併せなければならぬ。彼が、我々は愛するものを、いたるところに見出し、いたるところに相似をみる。その愛が大きければ、更にこの相似の世界はひろくそして多様となる。私の恋人は万象のアップブラピアツールであり、万象は私の恋人のエロンガツールである。と断章に書いた思想を、理解することが出来る。

私が川岸に立つて憂うつにその波に眺め入り、その流れの中に自分の考を没入したとき、私自身その川よりほかの何物であるかと、彼はザイスの子弟の中でいう。自然が語りかける言葉をとぎすまされた直観で詩人はその精神の内部で理解することが出来る。このように万象は理解されることを願い、理解しようと努めるわれわれの内部は宇宙になりうるというのであり、ゾフィーをみるハルテンベルクの眼は、生と死、人間対自然、彼とゾフィー、可視的なゾフィーから不可視的な半面を感じ得ることが可能となつていつた。このような過程を、日記は最初の決心が色々の形の動揺として示している。

彼女は死んで了つた。——僕も又死ぬ。——この世の中のなんという荒涼さ。

ゾフィーのことをよく心に想つてみる。——心を揺り動かされることは稀だ。——でも、心から想っているのだが。

決心は確固としている。ゾフィーはいよいよ僕の心をひきたててくれる。僕は彼女のうちにいよいよ深く生きる外はない。彼女を想う時だけは本当に幸福だ。

ああ僕が高所に止まつていることがこんなにも僅かとは。

この決意は十分しつかりしたものと思はれつつも、とても達し得られそうにもない遠くに在つて、まるで他人事のような気がして疑がわしい気持ちになる。

このように日記に誌し綴り続けている詩人の心中に、「かすかな不安をもつて、彼は自分が生あるものに抵抗しがたく惹きつけられていることを感じた。そうした時、彼は無理矢理に超現世的なものに沈潜しようと努力した。かれはゾフィーの墓の辺に坐して、彼女の木質、彼女が彼にとつて意味したすべてに点火しておのれのあつたらしい心の前に、ありありと描き出そうと努めた。」これをリカルド・フーフは「逆さまの悲劇」と名付けたが、彼は動揺し、廻り道しながらゾフィーへの愛の実現が彼の「決心」の実現が理性にはも早不可能に近い限度にまで追いつめられ、彼の「決心」の実現は、彼が夜の讃歌で辿りついた卑小な人間の生死などにかかわりない絶対純粋の愛の世界の実現、ゾフィーの死が詩人にとつて悲しみから、なぐさめに、理性によつて動揺することのない自我の極北にゾフィーを抱くことによつて彼は彼の悲劇から見事に脱出した。同時に彼の視界に現実の世界が入りこんで来た。

ユスト夫人に宛てて、僕は、死を超えさせる力をまったく新たに獲得しました。僕の木質は統一と形態を得ました。——来世の生がすでに僕のうちに萌ざしはしました。と書く彼の精神の弾力は、地上的な愛を拡充して宇宙が愛であるとする確信を、即ち自我の自由と不滅の実現の確信を受入れはじめた。

彼岸の世界との確固たる交通——ここに於いて彼の愛の対象が特定も又限定も持つことのないヒョウビョウたる愛の精神に拡散し、ゾフィーはも早、彼のグリウーネンゲンの愛人ゾフィー・フォン・キューンではなく、ゾフィーと呼ぶことによつて、彼が得んと意図し、希求した憧憬を、彼が心の中に熱烈な祈りとして描ききる理想の女性像を現はすことになつた。ゾフィーは彼女が地上においてもついていた一切の特徴を消し去り、キリスト教徒がマリアにささげる敬虔な想いの中に没入し去つた。ゾフィーへの愛は彼にとつて宗教となつた。

詩人が、ところが、すべての個々の現実の対象から分離して、自分自身を知覚し、自分自身を一つの理想的对象にする瞬間、宗教が生れる。私たちが、恋人を一つのそのような神になすならば、これは応用された宗教である。と書く時、彼はゾフィーを、抱かんと努力すればす

る程、彼の腕の中のゾフィーは遙かに離れ去つて、自からの心にとどめようとする彼女の面影は、最早それは、りくつてありごまかしだと自からを成しめてみても理性によつて作り出す彼女の姿であつて、彼の心の深部から彼に微笑みかけるゾフィーは、マリアのもつ広大な愛の姿に外ならなかつた。

詩人は、ゾフィーへの僕の愛は新らしき光となつて現われた。又、彼女は、最高のもの——唯一のもの。と日記に書く。

このようなゾフィー体験の推移と共に、詩人は彼女が逝つてから九ヶ月程して、フライブルクに赴き、父のすすめもあつて、そこの鉱山大学に入学した。ここで詩人は、シエリングを識り、ウイヘルム・シュレーゲルと共に、ヴァイマルにゲーテを訪ね、ライプツヒでジャン・パウルに会つている。更に大学においては、地質学者アブラハム・ゴットロープ・ヴェルネルの指導を受けた。

ゾフィーに向けられた悲歌追憶が、時の経過と共に彼の心に昇華しつつある時、これらの秀れた人々との出会いによつて、彼の精神の上に種々のかけが落ち、内心に崩壊していた彼の詩人が見事に成熟したのであつた。ゾフィーへの愛は、より深い精神のめざめのための一つのモメントであつて、いわば、愛の完成への道程として、前述のような幅と拡りを持つに至るゾフィー像に迄、高められたのであつた。

人間のうちに、僕らは神を索めなければならない。人間的の事件の内に、人間の思想のうちに、またその感覚のうちに神の心意は最も明らかに表われる。と詩人が考える時に、人間のもろさ、その運命の苛酷さ、その絶望の底から人間の生の肯定が浮び上つて来る。何故？ 確固たる存在者は、理性で割り切れない神秘、も一つの生を、その運命を耐えしのぶものに顯示する。彼がゾフィー体験なしに人間へのこのような限りない愛情を、素直に、確信をもつて抱き実現しようとして心を燃し得たであろうか。世界を解き明かす鍵が人間の内にあり、その人間の謎を解き明かす鍵は愛である。このような根本的モチーフは美しい作品ヒヤシンスとバラのメルヘンに結晶した。

元来、浪漫的憧憬は詩の世界における永遠の飛翔であつて、到達ではない。ゾフィーへの到達は、詩人にとつて永遠の道程である。いわば、彼のマリア像そのものであり、世界であり、人生そのものであつた。この人生において現実的な対象としてユリエ・フォン・シャルパンチエが現われたことは、彼にとつて極めて自然であつた。ユリエに対する彼の婚約は果して、非難されることであろうか。彼がゾフィーの再生と思われるという

時、彼は苦しい言い訳を自からにしているのもあろうか。詩人の心情に宿る主観的な形象としてのマリア崇拜と相触れ、相あわさつたゾフィー像を引き下げて来て、現実のユリエとならべることは、不可能と思われるし、滑稽である。かつて現実の一女性、しかも十分成熟もない凡庸な13才の女性の上に、詩的空想が限りなく拡げられた、すでに十分理想化されていたゾフィーは、彼女の死によつて、詩人の内なる女性像は、内面的に深化し、現実的地上的一切の特徴が失なわれ、現在の幸福や運命がも早彼女とはなんのかかわりももち得ないまでになつて彼の前に立つているのである。

彼自身は死の誘ないに打寛つて、今、数多くのすぐれた友人との友情に、生のデーモンに睨み、未来の希望に心を充している時、彼は、ユリエに現実の女性を見出し、彼女の上に豊かな愛の現実化を企てたのではあるまいか。いや、ゾフィーとユリエという現実の二女性を対比したり、二重写ししたりすることは、彼の敬虔な宗教感情には決して耐えられることではなかつた。

詩人にとつて、13才の小娘の中に、耳を傾け眼を凝らして、そのささやかな現われの中に、永遠の女性的なものを鋭敏に感知し、無限の彼岸を写し出すことによつて、宇宙全体を宿し、ゾフィーが彼にとつて文字通り愛の象徴となつた。彼にとつてゾフィーは詩であり、彼の作品の到るところに、ゾフィーが現われるのは、読者にとつても、地上のゾフィーの高められた象徴として詩的空想を満足させるのである。私の恋人は万象のアップブレビアトゥールであり、万象は私の恋人のエロンガトゥールである。と詩人自からも書き誌すゾフィーは、ユリエにおいて、現実に成熟すべき彼の愛の半面を実現したのであつて、オフテルディングンの中で、「現象の世界においてのみ二者であり、すべての離別者たちが相逢り成就の世界（第二部）において、いつかは一体となる同一者として示めす」ことによつて、ゾフィーとユリエについての「彼の二重恋愛の悩みは解決されている。」とみることは、詩と現実を区別することに似て、彼の二人の女性に対する解決とは受け取り難いものがあるように思われる。もしも、われわれが、一つのものを愛することを理解するならば、われわれはまた、すべてをもつともよく愛することを理解する。すべてをゾフィーに変化する術——或は、その逆。という彼の言葉は、生命なき物質についても、いろいろなのであつて、このようなゾフィーにユリエは変化する筈であつた。

1801年3月28日、彼は静かに世を去つた。ユリエとの結婚を目前に控えて、弟カールのピアノに耳を澄せながら。オフテルディングンを未完成のまま、29才で夭折した詩人の生涯は、憧憬であり、浪漫的愛そのものであつた。（1954年9月5日）